

Title	おもいおこすことども
Author(s)	川尻, 進
Citation	懐徳. 1961, 32, p. 89-90
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90364">https://hdl.handle.net/11094/90364</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# おもいおこすことども

川 尻 進

「ただ様さまも候はず南無阿彌陀佛と稱ふるが即ち往生にて候」

これは天台宗眞盛派の開祖慈攝じしやう大師の有名な奏進法語の一節である。

最近書棚を整理していて發見した「慈攝大師」と題した小冊子を繙いて、このところを口ずさむとともに過ぎし日の憶は遠く、大戦中の江州は叡山の麓坂本西教寺にとぶ。

そのころB29はまだ本土を襲つていなかつたが、戦局は不利に向い、世は擧げて精神作興、身心鍛錬と盛んに、みそぎといつて水をかぶつていた頃であつた。

ある用務を帯びて同僚と二人で大洋方面に出張の砌り、別れてただ一人日頃思いつめていた坂本西教寺に詣でることにした。閑かな寺内を、我が隣村、伊勢大仰おほあやうの出生と言うだけでもなつかしい大師の廟をそここことさがし

おもいおこすことども

もとめて、それらしいものを發見、心引かれるままにその石段下に至つたとき、ひよつこりどこからか紫のややくたびれた衣に、自然木の杖によつてあらわれた一老僧があつた。拙僧もお参りするからと、老の身をあやしく先に立つ、石段を登りつめて、すやの錠前を外せば、風化作用を受けていない五輪塔があらわれた。老僧の手にある線香を分ち與えられるまま供えてともにぬかずく

拜し終つて歸途につかんとするに

老僧の曰く、別に急がない旅ならば暫し憩いたまえと、うす暗い室をいくつもいくつも通り過ぎて、一番奥の座敷に招じ入れられた。

その途中襖の繪、各室々の説明などを聞かされたが今はもう記憶がない。

心の中で、此の老僧は一體何ものかと思つたが、それは

やがて判明するときが来た。

御來客だからお茶をと納所へ聲をかけて常の居間らしいところに入るや、床柱を背に分厚い座布團の上にやおら身を下した。

こちらはどこに座を占めてよいやらうろろしていたさまが、今でも目に見えるような気がする。遙々一人よく詣でてくれた、拙僧かつて伊勢津市の西來寺に住職したことがある、また倭村成願寺（これは筆者の氏寺）にいつたこともある、先般各宗管長上京

陛下に拜謁優詔を賜い、そのときの旅行の疲れで胸をいため、やつとこの頃にいたつて恢復し大師の廟に毎日一回は詣でることになっているなどを語り、別れに際して小冊子「慈攝大師」と南無阿彌陀佛の名號とを與えられて寺を辭去した。

自分はその當時、伊勢久居町の近郊にある農家の離れを借りて松阪に勤めをもつていた、物資は相當窮屈になつていて、件の名號はある知人を介して伊勢の山田で表装がやつと出来上つた。

このことがあつてから、大分たつてからのことであつたと思う、縁談の聞き合せか何かで心やすくなつた、松阪市の郷土玩具にたしなみの深い某氏が訪ねてくれたときのこと、偶々かかつていた「南無阿彌陀佛」を一目み

るや反射的に「あれははなはだいけない」と。なおつけ加えて七十年とわざわざ書き添えた老僧の手跡とも思えない、多分弟子の筆達者なものに代筆させたものである。若しも自身で書いたとすれば、此の老僧は俗物だ、なぜならば人間七十も過ぎれば、あくも抜けて、もう少し稚拙とでもいうところが出ておる筈だ、餘りにもこれは整い過ぎて美しく書かれている、と。

その後一、二年して此の老僧が遷化されたということを知つた。

名號は自分の手に今も尙大切に保存されている。